十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉔2222
©十勝毎日新聞社 1987

宇宙基地誘致への提言 ⑤

まず風洞施設欲しい

息の長い取り組みを

航空宇宙技術研究所所長
長洲　秀夫氏（63）

―航空宇宙技術研究所では宇宙往還機・スペースプレーンの研究をしているそうですが、どんな計画なんですか。

HIIは一流の性能

乗り物自体は宇宙活動において最終目標ではない。しかし、ロケットとかの乗り物がなくては宇宙活動はできない。ヨーロッパでは一時乗り物はアメリカの物を借りて―という話はあったが、結局それでは自由にならないので、アリアンロケットなどを開発している。日本はHIIロケットを開発中だ。

これはペンシル型ではアリアンより優れた性能を持った一流のものになるだろう。しかし、先の事を考えると、コストの面で一回きりでなく、何回も使えるものへ技術が向くのは当然。

その点アメリカのスペースシャトルは確かに素晴らしいものだが、これは途中のステップの物といえるだろう。

五月に出来た宇宙政策委員会長期政策懇談会の報告（宇宙開発の新時代を目指して）の中では有人活動がうたわれている。カーゴ（荷物）には新しいエンジン、新しいエレクトロニクス、人工知能、構造材料：色々新しい問題が生じる。

実験機計画数年後に

例えばエンジンにすると、地上から出る時、着陸する時はジェットエンジンのようなもの、それより高いマッハ数ある程度までいくと実験機のになると、ラムジェットエンジン、それより高いマッハ5段階がくる。予算と研究の進から10ぐらいになると超音速み具合だが、願わくは数年後で空気を流すスクラムジェットに実験機の計画を確立できエンジン、それより上となればと思っている。

ると空気がなくなるのでロケスペースプレーンは飛行機ット式になるーなど三、四種とロケットの技術をミックス類ものエンジンを使う複雑なシステムになる。これはまだ実態は難しい往還機

その意味で水平離着陸のスペースプレーンは将来を描くのにいいものだが、実態は難しい。今までと質が違っているからで、そういうものこそ、こうした研究所が要素技術を研究しなければと思う。

マッハ数の高い空気力学、世界的にみても確立されていたものだけに〝我田引水〟だが、飛行機の研究をしてきた航技研がやはり研究に適していると思う。

―北海道・十勝で航空宇宙産業基地を誘致する動きが活発化していますが、そうした動きについては…。

候補地、心強い

航空宇宙に関心を持っていただくことは大変有り難く、心強い。こうした大プロジェクトは国だけでなく、民間、地方の協力なくしてはできない。

そうした航空宇宙産業基地が、いつごろ、どこにできるかということは全くこれからの話だが、航技研ではもっと大きな風洞施設が欲しいと考えているし、日本全体としては実験機を飛ばす滑走路も必要になるでしょう。

（十勝の地図をみながら）広くていい場所という感じだし、こうした候補地があるのは心強い。ただ息の長い話なので、そのつもりで取り組むのがいいと思う。

（つづく）

略歴　大正十三年東京生まれ。東京帝大（現東大）第二工学部物理工学科卒。航技研空気力学第一部長などを経て六十年所長。

年間キャンペーン「目指せ宇宙基地」第七部